

# 婦人会報

立教184年 9月

令和三年  
2021年



天理教婦人会旭日支部

通卷507号

# 女子青年

webブックレット

『Blossom—lite—no. 4』を配信しました。

旭日女子青年オープンチャットで見れます。読んでみてくださいね。

QRコードから入って、名前（ニックネームでも何でもいいですよ）を入力すれば見れます。大教会ホームページにも載っています。



内 場 日

容 所 時

十月五日 (火) 午前十時

旭日大教会

教祖祭

お願いごとめ

よろづよ八首

お話 (おふでさき 第六号より)

戒場委員部 坂本 みさ子

弁当配布



# 十月例会案内

## 今月の表紙より

「菜根譚」は、中国古典の一つで洪自誠（こう・じせい）が著したものです。前集222条・後集135条からなり、前集は人の交わりを、後集では自然と閑居の楽しみを説いています。今月の表紙の言葉はそんな「菜根譚」の後集38項にでています。「吟風弄月」という言葉です。

まず、「菜根譚」について説明いたします。「菜根」という言葉は、「人はよく根菜を噛みえば、すなわち百事をなすべし」という故事に由来しています。「堅い菜根をかみしめるように、苦しい境遇に耐えることができる」という意味です。著者が人は逆境において真価が試されるという思いをこめてつけたと考えられています。「菜根譚」には逆境を経験したからこそ生まれた「生きるヒント」が満ちあふれていると言われています。その中で「吟風弄月」。風に吹かれながら詩を吟じて、名月を眺めながら楽しむということからきています。また、この表紙の中には出ていませんが、書かれた上田さんは「弄」を「喜」として読まれていました。月を眺めながら詩を詠めることを喜び事だとして受け止めておられたのでしょね。

※十月の鳴物当番はありません。

## 十月例会役割

指図方	賛者	扈者
辻 左知子	奥村 はる恵	庄司 典子
	松田 よし子	坂本 みさ子

# 「おつとめの心構え」

vol.2

前回に引き続き「おつとめの心構え」について述べさせていただきます。

よろしく  
お願いします



●何のためにおつとめをするのでしょうか。(前号で「かぐらづとめ」「教会の月次祭」について記載しています)

## ◎「朝夕のおつとめ」

「かぐらづとめ」や「教会の月次祭」のおつとめは親神様に対する祈念祈願のおつとめであるのに対し、朝夕のおつとめには、日々のご守護に対するお礼を申し上げる意味が多分に含まれています。朝づとめには、親神様の十全なるご守護に感謝して、今日一日のお連れ通りをお願い申し上げ、世界のたすかりをお願いし、夕べには一日のお礼を申し上げます。必ず朝夕の時間を定めて、決まった時間につとめることが大切です。

## ◎「お願いづとめ」

「お願いづとめ」は、身上事情などのお願いの筋を申し上げ、心を定め、心を一つに日時を仕切つてつとめさせて頂きます。仕切りは、三日三夜を越えてはならないとお教えいただけます。一日一夜、二日二夜、三日三夜と仕切つてほしいし、三日つとめても効をお見せいただけない場合は、改めて心定めをし、再度仕切つて、追い願いをつとめさせていただきます。



座りづとめだけでお願いすることもあれば、座りづとめから十二下りを一日三回、また六回繰り返してつとめることもあります。いずれにせよ、ご守護いただけるまで続けることが肝心です。

## ●この「おつとめ」をつとめることで大切なことは何でしょう。

◎第一には、「神様に心を向ける」ということです。

おつとめは「かぐらづとめ」の理を戴いているのですから、今、自分自身がちば、かんろだいの前で、つとめているような気持ちを持つことが大切です。

おつとめをつとめる者の心が、ちば、かんろだいにまっすぐに向かつてつとめるならば、遠く離れていても、ちばの理、親神の力が働くのです。

◎二番目に大切なことは、一手一つに心を合わせて、つとめるということです。

手振りにしても、鳴り物にしても、お教えいただいた通りにつとめさせていただけよう練習を重ね、一手一つに合わせる努力をする。と共に、一つの理、親の理に心を合わせてつとめることが大切です。親の理に心合わせ



られるよう、常日頃から我が心のほこりを払う努力をすることが肝要です。

◎第三に大切なことは、人をたすける心を持つということです。

本来おつとめを勤めるのは、我が身、我が家の幸せのみを、願うためではなく、世界中の人の幸せ、すべての平和な治まりを、祈念するためです。

その思いをもつて、与えられた役割を精一杯、真剣につとめる、また、直接、役にたずさわらなくても、「みかぐらうた」を一生懸命、唱和することが、大切なことです。



# 朝起き、正直、はたらき

— 生き方の基本となる 三つの宝

おやさまのおこころ

— 逸話篇より —

日常生活のあらゆる場面で

陰日向のない真実の働きを。

お屋敷から少し北にある櫛本村の飯降伊蔵さんは、「櫛本千軒きつての正直者」といわれた大工でした。

元治元年（一八六四年）、妻の産後の煩いを教祖におたすけいただき、以来、毎日お屋敷へ通っては何かと御用をつとめていました。

あるとき教祖は、伊蔵さんに「掌を拡げてごらん」と仰せになりました。

そして、籾を三粒持つて、「これは朝起き、これは正直、これは働きやで」と、一粒ずつ掌の上にお載せくだされ、「この三つを、しっかり握って失わんようにせにゃいかんで」と仰せられました。

（二九「三つの宝」から）

伊蔵さんは、この教えを一生の心の宝とし、その後も長年にわたってお屋敷へ足を運び続けました。その行き帰りに、壊れた橋や道路を見かけると人知れず修繕するなど、陰日向のない態度で日々を通りました。

のちに教祖は、伊蔵さんの長女よしゑさんにも次のようにお聞かせくだされています。

「朝起き、正直、働き。朝、起こされるのと、人をおこすのでは、大きく徳、不徳に分かれるで。蔭でよく働き、人を褒めるは正直。

聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。

もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで」

（一一一「朝、起こされるのと」から）





## こうした伊蔵さんの真実の種蒔きとは？

その手がかりを、教祖が伊蔵さんにお諭しくだされた数々のお言葉の中に見いだすことができます。

あるとき教祖は「この道はなあ、陰徳を積みなされや。人の見ている目先でどんなに働いても、陰で手を抜いたり、人の悪口を言うていては、神様のお受け取りはありませんで」と仰せられました。

のちに伊蔵さんは「陰徳は些細なことや。こうすれば後のためになる、人のためになると、このちょっとしたことに気をつければ、陰徳は、積まれ、神様は喜んでくださるのや」と述懐しています。人目につかない陰の善行は、人から評価されないものであり、見返りも望めません。しかしながら、そうした無欲の行為にこそ誠真実が込められており、親神様もその心をお受け取りくださることと思わせて頂きます。

『“逸話のこころ” たずねて』 引用



発行日

令和三年九月五日

発行者

岡本道子

発行所

天理市田井庄町一二八  
天理教婦人会旭日支部